第二章　明石の物語　上洛後、源氏との再会

［第一段　大堰山荘での生活始まる］

　家のさまも*おもしろうて（家の造作様式は注文通りの出来栄えで納得いくもので）、年ごろ経つる海づらに*おぼえたれば（長年住みなれた海辺の邸に似ていたので）、所変へたる心地もせず（住居を変えた違和感は有りません）。　*「面白し」は＜原義は目の前が明るくなる感じをいう＞と古語辞典にある。その顔の表情を晴らすものが、＜風情のあるもの＞や＜情緒深いもの＞ということなのだろう。しかし此処の文で、ただ＜風情がある＞と言ってみても、山荘成りの環境に包まれているわけで、後述文に繋がらない。そこで、むしろ後述文から逆推して＜注文通りの出来栄えに納得した＞ことにした。　*「おぼゆ」は＜自然にそう思われる、感じる＞だが、＜面影を感じる←似る＞との説明も古語辞典にある。

　*昔のこと思ひ出でられて（それでも尼君は山荘の佇まいに祖父が居た頃の昔の暮らしぶりが思い出されて）、あはれなること多かり（感慨一入でした）。　*「昔のこと」については、注に＜主語は尼君。「られ」自発の助動詞。『万水一露』は「祖父の旧跡なるゆゑなり」と注す。＞とある。因みに此処の文を、前節の「所変へたる心地もせず」で文落せずに＜上京した気分にならず、却って明石での暮らしが思い出されて、感慨一塩でした＞との文意にも解せば、然様に解せ無くも無いようだが、それでも注釈に従う方が、より時空が広がるし、後文への意味合いも明石寄りから中央寄りに気持ちの重心が微妙に変わる気がする。

　造り添へたる廊など、ゆゑあるさまに（造り加えた中門廊などから絶景が望めて）、水の流れもをかしうしなしたり（庭の配水ともよく調和していました）。まだこまやかなるにはあらねども（まだ細部には十分に手入れの行き届かないところもありましたが）、住みつかばさてもありぬべし（住む内に整えられるでしょう）。

　親しき家司に仰せ賜ひて（光君は事情を心得た執事に命じなさって）、御まうけのこと（到着祝いの一席を）せさせたまひけり（設けさせなさいました）。渡りたまはむことは（ただご自身がお訪ねになる事は）、とかう思したばかるほどに（あれこれと諸事情を勘案なさっている内に）、日ごろ経ぬ（幾日も過ぎました）。

　なかなかもの思ひ続けられて（そんなわけで御方は物思いの日を続けさせられて）、捨てし家居も恋しう（故郷の明石の暮らしも恋しく）、つれづれなれば（手持ち無沙汰でもあったので）、かの御形見の琴を掻き鳴らす（光君が明石の家に置き残して行った七絃琴を爪弾きます）。

　*折の（秋も深まる折柄）、いみじう忍びがたければ（寂しさも一入だったので）、人離れたる方にうちとけて（人気のない山間に琴の音が溶け込んで）、すこし弾くに松風はしたなく響きあひたり（少し弾いただけでも松風が大げさなほどざわついて共鳴します）。　*「折（をり、季節柄）」については明示が無い。一行が明石を出立した日の描写に「秋のころほひなれば」とあったきりで、その数日後に大堰山荘に到着し、今また其の幾日か後の事柄である。この際に少し時系にそって話を整理して、同時に作者の意図も確認したい。辿れる直近の日付は、御前絵合が開催された「三月二十日あまり」である。当年、光君 31 歳。25 歳で失職し、26 からの 2 年間を須磨・明石を流浪し、28 歳の秋に復権し、今は其の 2 年後という事になる。そして絵合の成功で人心を完全に掌握したように見えた反面で、光君は同時に出家を考えて嵯峨野に御堂建立を進めていた、とい

う記事で「絵合」巻は終わる。そしてこの「松風」巻の冒頭に二条東院の落成が記される。そして光君は東院に明石君を招くが、明石君は院内での埋没を恐れて嵯峨野清涼寺に近い、少し南の大堰山荘を改修して移住する事にした。斯かる話の流れを見ると、栄華の反面で出家を考えたという記述に感じた強引さが、幾分は設定上の御都合本意によるものだったように思えてくる。いや、＜栄華の反面で出家を考えた＞事自体は良い構想かも知れない。ただ筆致が些か唐突で、練れていなかった印象を覚えている。ともあれ、この一連の推移に日付の記述は無い。で、大まかに東院落成を晩春か初夏、督促と改修が夏の三ヶ月間に進んだ、と見る他は無い。総じれば、幾つかの要素を含みながらも光君は当時点なりに着々と姫君の入内準備を進めていた、という事には成りそうだ。

尼君、もの悲しげにて寄り臥したまへるに(浮かない様子で脇息に寄りかかって居らしたが、思いがけない松林の風音に)、起き上がりて、

「身を変へて一人帰れる山里に、聞きしに似たる松風ぞ吹く」（和歌 18-06）

「変わり果てても古里は、松風の吹く懐かしさ」（意訳 18-06）

御方、

「故里に見し世の友を恋ひわびて、さへづることを誰れか分くらむ」（和歌 18-07）

「お国訛りの懐かしさ、都人には通じぬか」（意訳 18-07）

*尼君は頼り無い暮らしの中でも、久しぶりに帰った都の「聞きしに似たる松風」を＜懐かし＞んだ。そこで御方にとって＜懐かし＞いと言えば、「故里に見し(懐かしい故里の明石で出会った)」、「世の友を(都人の懐かしい光君を)」、「恋ひわびて(懐かしんで)」、「さへづることを(懐かしい田舎の曲を弾いてみても)」、「誰れか分くらむ(都では誰も其の懐かしさが分からないようだ)」、と唱和した、というところだろうか。都を懐かしむのと、田舎を懐かしむのでは、必ずしも共感しているとは言えない気もするが、「都人」を懐かしむということなら如何にも同調してはいるようだ。「さへづる」は＜小鳥がしきりに鳴く＞＜口数多く早口でしゃべるのを軽蔑していう、ぺちゃくちゃしゃべる＞＜地方の人や外国人などが耳慣れない言葉でしゃべる＞と大辞泉にある。使い甲斐の有る語のようで、此処での「さへづる」は＜琴弾き＞を＜方言の懐かしさ＞に掛けた絶妙の使い回しなのだろう。為時女はこの用法をどうしても披露したくて、尼君と御方に歌を詠ませたのかも知れない。

［第二段　大堰山荘訪問の暇乞い］

かやうにものはかなくて明かし暮らすに(このように手応えの無いまま御方が暮らしているのを)、大臣、なかなか静心なく思さるれば(光君もさすがに気になさって)、人目をもえ憚りあへたまはで、渡りたまふを(この上は人目も憚らずにお出掛けなさるのですが)、

女君は(二条院の正妻には)、かくなむとたしかに知らせたてまつりたまはざりけるを(こうした事情をはっきりとお知らせ申しなさっていらっしゃらなかったのを)、例の、聞きもや合はせたまふとて(例によって外からお聞き入れ合せになっては話が拗れそうだと)、*消息聞こえたまふ(御自分でご説明申し上げなさいます)。　*「消息(せうそこ)」は古語辞典に＜状況や用件などを手紙などで知らせること。また、その手紙や連絡。音信。音沙汰。たより。＞または＜他家を訪れて、来意を告げ、案内を

こうこと。しょうそこ。＞とあり、今日での主たる意味である＜人や物事の、その時々のありさま。動静。状況。事情。＞は主には取り上げないようだが、此処では正に其の＜事情＞の意味であり、＜連絡や型通りの挨拶＞でもなく、まして＜手紙や他人を介しての遣り取り＞などではないだろう。「女君」と閨場面表記しているし、実際に場面は二条院内だし、遣り取りの内容からしても微妙な事情説明なのだから。

「*桂に見るべきことはべるを(桂で調べ事があったのですが)、いさや(いやどうも)、心にもあらでほど経にけり(つい行きそびれて遅れてしまいました)。　*「桂(かつら)」とは続く文に「桂の院」とあり、桂の領地に建てた光君の別荘らしいが、不思議に何の注釈も無く、何とも捉え難い。尤も大堰川は桂川の上流だから、大堰山荘も桂流域に違いない。洛中から見れば同じ西方で、北から嵯峨野、大堰、桂と位置する。いずれにしても、是が大堰山荘へ出向く口実なのは明白だが、後の記述を見ると、夫人はわざと仰々しく光君の桂行きを方々に言い触らしたらしい展開がある。

訪らはむと言ひし人さへ(訪ねると言ってある人までが)、かのわたり近く来ゐて(其の近くに来て居て)、待つなれば(待っているという事なので)、心苦しくてなむ(行かなくては心苦しくてなりません)。嵯峨野の御堂にも、*飾りなき仏の御訪らひすべければ(供え付けの済んでいない仏像の開眼供養をしなければなりませんから)、二、三日はは べりなむ(二、三日は掛かります)」
*「飾りなき仏の御訪らひ」は訳文では＜飾り付けのできていない仏像のお世話＞とされている。その逐語訳は説得力があるが、＜お世話＞の方法は「開眼供養」なのだろう。

と聞こえたまふ(と光君は夫人に閨で御話し申し上げなさいます)。

「桂の院といふ所、*にはかに造らせたまふと聞くは(急に造営させなさると聞いたが)、そこに据ゑたまへるにや(そこに約束した女を住まわせなさるという事なのか)」と思すに(と正妻は御思いになると)、心づきなければ(素直に受け入れられず)、　*桂院の俄工事が本当にあったのかどうかは不明だが、夫人が桂院に明石君が住むかのように勘違いをする背景には、入道から大堰山荘について改修の知らせを受けて、光君は直ぐに惟光朝臣を建築確認に派遣した、という記事があったが、その際に惟光が更に改修に手を加えたとも述べられていて、二条院からも其れなりの人夫動員があったのかも知れず、それが表向き桂院改修とされていたのかも知れない。

「*斧の柄さへ改めたまはむほどや(斧の柄まで付け替えなさるほどの長期のお出掛けになるのでしょうか)、待ち遠に(待ち遠しい事です)」と(と皮肉を言って)、心ゆかぬ御けしきなり(不満気なご様子でした)。　*「斧の柄さへ改めたまはむ」は「斧の柄朽つ」という中国の故事を踏まえている、と注釈にある。この中国の故事は「述異記(じゅついき)」の「爛柯(らんか)」というものらしく、「晋の時代、王質という木こりが森の中で童子らの打つ碁を見ているうちに、斧の柯(え)が爛(くさ)ってしまうほどの時がたっていた。驚いて自分の村に帰ってみると既に長い年月が経ち、知人は皆死んでいたという。」と諸説に粗筋が示され、それほどに面白い遊びという事だろうか、「囲碁」の別称と大辞泉にある。そして例えとしての意味は＜囲碁に夢中になって時のたつのを忘れること。転じて、遊びに夢中になって時のたつのを忘れること。＞とある。つまり紫の君は光君に＜時の経つのを忘れるほど女遊びに夢中になって、私がとっくに死んだ後に帰ってくるんでしょ＞と皮肉った、ということらしい。なお、注には更に＜「斧の柄は朽ちなばまたもすげ替へむ憂き世の中に帰らずもがな」(古今六帖、二)＞が参照出典とされていて、＜斧の柄は朽ちたら何度でも挿げ替えよう、憂き世の中に帰らなくても済むのなら＞というのでは、是はもう金輪際戻らない。

「例の(是はまた)、比べ苦しき御心(例えの理解に苦しむ御判断で)、いにしへのありさま(昔の女遊びをしていた我が行状は)、名残なしと(今や跡形もないと)、世人も言ふなるものを(世間でも言っているというものを)」、何やかやと御心とりたまふほどに(などと光君は何やかやと正妻の機嫌を取りなさっているうちに)、日たけぬ(昼になってしまいました)。

［第三段　源氏と明石の再会］

忍びやかに(小編成で目立たないように)、御前(ごぜん、先導者には)疎きは混ぜで(うときはまぜで、事情を知る側近以外は加えずに)、*御心づかひして渡りたまひぬ(初めて姫君と見える期待をひた隠して普段どおりの平静を装い桂にお出掛けなさいました)。　*「御心遣ひ」とは＜特段の配慮＞だろうが、何に対して如何いう＜配慮＞をしたのだろうか。大堰山荘には明石の君も尼君も居るが、何よりも姫君が居て、初めて会えるのである。光君にしてみれば、帝の后を予言された我が娘への期待も不安も相当に大きかったに違いない。それだけに、外部からの要らぬ詮索を避けたくて、殊更に平静を装う必要があった。だから、なるべく普段どおりに振舞うという＜配慮＞に違いない。

たそかれ時におはし着きたり(夕暮れ前にはお着きに成りました)。狩の御衣にやつれたまへりしだに(明石で御会いした時の狩衣姿で粗末にしていらしてさえ)世に知らぬ心地せしを(世にまたとない美しさだったものを)、まして、さる御心してひきつくろひたまへる御直衣姿(再会を祝して身支度なさった貴人姿であれば)、世になくなまめかしうまばゆき心地すれば(ありえないほど優美で眩しい光君の美しさに)、思ひむせべる心の闇も晴るるやうなり(御方は思い嘆いていた心の闇も晴れるようです)。

めづらしう(何と愛らしく)、あはれにて(驚きを持って)、若君を見たまふも(姫君を御覧になるにも)、いかが浅く思されむ(光君はどれほど深い思いで居らした事でしょう)。今まで隔てける年月だに(今まで会えずに居た長い年月を)、あさましく悔しきまで思ほす(愚かしかったと悔やみなさるほどでした)。

「*大殿腹の君を(おほとのばらのきみ、葵の上の産んだ子を)うつくしげなりと(優れた人のようだと)、世人もて騒ぐは(世間が持て囃すのは)、なほ時世によれば(やはり時流に乗った大臣家の権勢におもねって)、人の見なすなりけり(皆は見做しているわけだ)。　*注に＜夕霧、時に十歳。＞とある。太政大臣になると予言された子である。尤も、君の祖父である大殿(おほいどの)は、今現在で位極まる太政大臣である。

かくこそは(この子の顔立ちこそは)、すぐれたる人の*山口は(優れた人たる兆候が)著かりけれ(しるかりけれ、はっきりと現れている)」　*「山口(やまぐち)」は＜山の登り口、山への入り口＞＜鷹狩(たかが)りで狩り場に入ること。また、その所。＞＜(猟師が山の入り口で、獲物の有無を直感するというところから)物事のきざし。兆候。＞と大辞泉にある。

と(と光君は愛娘の)、うち笑みたる顔の何心なきが(笑顔を見せる無邪気さに)、愛敬づき(あいぎゃうづき、愛敬があって)、*匂ひたるを(生気に溢れているのを)、いみじうらうたしと思す(しみじみ可愛いと御思いになります)。　*「匂ふ(にほふ)」の原義は「丹穂(にほ、赤い実り)」と古語辞典に

ある。「匂ふ」が今日で主に使う＜香りが立つ＞という意味に至るのは、赤味が差す→生気溢れて艶やかに美しい→香り立つ、といった展開のようだ。まぁその語感は今でも残っていて、「匂ふ」を＜生々しい気配が漂う＞という意味でも良く使うところだ。

*乳母の(宣旨の娘だった乳母は)、下りしほどは衰へたりし容貌(明石に下ったときは貧乏暮らしで痩せた風貌だったが)、ねびまさりて(歳を経てふっくらして)、月ごろの御物語など、馴れ聞こゆるを(明石暮らしの出来事などを親しく報告申すのを)、あはれに(光君も流浪の日々を思い出して共感し)、さる塩屋のかたはらに過ぐしつらむことを、思しのたまふ(明石の田舎暮らしをねぎらいなさいます)。　*「乳母(めのと)」とは父帝付きの高級女官だった宣旨という女の娘が、両親に先立たれて貧乏暮らしをしていたので、姫君の中央文化教育係として、光君が明石に派遣した女房である。二年前の二月末の御世代わりから程無い、三月十六日に姫君が誕生し、皇后を予言されていた子なれば必ず中央教育を施さねば成らないと、誕生から時を置かず光君は宣旨の娘を姫の乳母に送り込んだ。

「ここにも、いと里離れて(此処でも随分遠いので)、渡らむこともかたきを(出向くのが容易では無いから)、なほ、かの本意ある所に移ろひたまへ(やはり当初考えた東院へ御越し下さい)」とのたまへど(と光君は御方に仰いますが)、

「いと初々しき程(うひうひしきほど、もう少し都暮らしに慣れるまで)過ぐして(此処で過ごしてから、考えます)」と聞こゆるも(と御方がお答え申し上げるのも)、ことわりなり(尤もなことです)。夜一夜(よひとよ、一晩中)、よろづに契り語らひ(さまざまな事に関して将来を話し合い)、明かしたまふ(夜を明かしなさいます)。

[第四段　源氏、大堰山荘で寛ぐ]

繕ふべき所(手入れすべき箇所を)、所の預かり(以前からの留守居番や)、今加へたる家司などに仰せらる(新たに任じた管理人に光君は指示なさいます)。

桂の院に渡りたまふべしとありければ(殿が桂の院に御出ましなさる知らせがあったので)、近き御荘の人びと(近くの自領の使用人たちが)、参り集まりたりけるも(桂に馳せ参じ集っていましたが)、皆*尋ね参りたり(皆が山荘まで御用聞きに参りました)。前栽どもの折れ伏したるなど(皆には前庭の植え込みの折れ伏した草木などを)、繕はせたまふ(整えさせなさいます)。　*「尋ぬ」は＜後を追う、捜す、問う＞で＜光君の居場所を捜して＞人びとが移動したのだろう。この描写は、光君の権勢の華やかな賑わいを思わせるが、その賑わいが夫人に筒抜けだという構図の滑稽譚かもしれない。

「ここかしこの立石どもも(たていしどもも、山や崖などに見立てて縦置きに配した庭石の数々も)皆転び失せたるを(みなまろびうせたるを、全て倒れて意味を失っているが)、情けありてしなさば(情緒豊かに整えれば)、をかしかりぬべき所かな(見映えしそうな邸のようだ)。

かかる所をわざと繕ふも(ただ、こういう田舎風の邸を念入りに手入れするというのも)、*あいなきわざなり(張り合いのないものだ)。　*「合い無き業」は逐語なら＜割に合わない仕事＞くらいだろうが、光君にとっては少なくとも業務上の＜仕事＞ではないから、より曖昧な＜張り合いの無いもの＞と言い換えた。このような「わざと」らしい語用は偏に、作者の言い回しとして「わざと」を「わざなり」の洒落言葉で受けたいが為の

「あいなき」仕業とも思うが、洒落言葉の作用は山荘から明石浜家への話題転換も果たしていて、芸人の話術にも似た巧みさ、いや逆に芸人がこうした手法を物語から学んだのかも知れないが、による表現ではあろう。

＊さても過ぐし果てねば(こうした田舎家で死ぬまで暮らすわけではないから)、立つ時もの憂く(去る時に拘った分だけ未練が増して)、心とまる(離れ難く)、苦しかりき(苦しんだものだ)」
＊此処で話題はすっかり、三年前の明石浜での惜別へと変わっている。御方との再会を懐かしみつつ、それとなく権勢を誇ってはの、一種の誘いの口説き文句なのだろう。

など、来し方のことも(過ぎた日のことも)のたまひ出でて(懐かしく話し出しなさって)、泣きみ笑ひみ(泣きもし笑いもして)、うちとけのたまへる(親しく寛いでいらして)、いとめでたし(とても和やかな賑わいです)。

＊尼君、のぞきて見たてまつるに(光君らの様子を覗いて拝見申すと)、老いも忘れ、もの思ひも晴るる心地してうち笑みぬ。　＊注に＜東の渡殿近くの母屋の中から源氏を見る。＞とある。次の文から、光君が東の渡殿に出ている事は語られるが、尼君は正殿と東対屋のどちら側に居るのだろうか。殿を迎えるための山荘なのだから正殿は殿の間で普段は空けてある、というのが尤もらしい。しかし、表向きは殿の院ではなく忍び通い処だという建前で整えるとすれば、権利証の保有者である尼君が正殿を住まい部屋に使う、というのも尤もらしい。ただ、絵の据わりの良さは光君の寝殿だろうか。

東の渡殿の(ひんがしのわたどのの、光君が東の渡殿から)下より出づる水の心ばへ(その下を通って南庭へ流れる遣水の流れを)、繕はせたまふとて(整えさせなさる指示をして)、いとなまめかしき(とても艶々しい)袿姿(うちきすがた、内着姿で)うちとけたまへるを(下働きの者と親しく御話しなさるのを)、いとめでたう(とても和やかで)うれしと見たてまつるに(嬉しく尼君が拝見していると)、

閼伽の具(あかのぐ、お供えの水杯)などのあるを(などが向かいの部屋にあるのを)見たまふに(光君も目になさると)、思し出でて(母御の出家を思い出しなさって)、

「尼君は、こなたにか(尼君の部屋は此方でしたか)。いとしどけなき姿なりけりや(これはとんだだらしない格好をしておりまして)」とて、御直衣召し出でて(上着を持ってこさせて)、たてまつる(御召になります)。

几帳のもとに寄りたまひて(そして尼君の部屋の衝立の許にお寄りに成って)、

「罪軽く(大禍無く)生ほし立てたまへる(育て上げなさった)、人のゆゑは(明石君のそれに相応しい人となりは)、御行なひのほどあはれにこそ(尼君の念仏行がよほどご熱心だったからだろうと)、思ひなしきこゆれ(推察申し上げます)。　＊注に＜『集成』は「「罪軽く」は、前世の罪の軽いこと、果報によってこの世に美しく生れ育つ意。「ゆゑ」は、理由。尼君の勤行ゆえに、前世の罪が軽くなったという」と注す。「人」は姫君をさす。＞とある。が、良く解らない。「罪軽く」は「恙無く」とは違うのだろうが、「生ほし立てたまへる」を修辞しているし、＜契り＞ではなく「御行なひのほどあはれ」に拠って左右されるものらしいので、＜運命＞や＜縁＞よりは＜厄除け＞に近い対象が想定される。また、「ゆゑ」も含みの多い語だが＜由緒、身分、然

るべき素姓＞との意が古語辞典に紹介されていて、「生ほし立てたまへる」を受ければ＜それに相応しい人となり＞とは読めると思う。

いといたく思ひ澄ましたまへりし御住みかを捨てて(大変深く心を澄ませて暮らして居らした明石を捨てて)、憂き世に帰りたまへる心ざし(俗世の都に御帰りに成った気苦労は)、浅からず(簡単ではありません)。またかしこには(また明石には)、いかにとまりて(入道殿がさぞ寂しく留まったままで)、思ひおこせたまふらむと(此方に思いを寄せていらしているだろうと)、さまざまになむ(色々思われます)」

と、いとなつかしうのたまふ(とても親しげに仰います)。

「捨てはべりし世を(かつて思いを断ち切った都に)、今さらにたち帰り、*思ひたまへ乱るるを(考え致せば悩み深い所を)、推し量らせたまひければ(殿にお察し頂いたので)、命長さのしるしも(長生きした意味合いも)、思ひたまへ知られぬる(考え致せば報われます)」と、うち泣きて(尼君はつい泣いて)、　*「思ひたまへ」の「たまふ」は一般的な謙譲語ではなく、特殊な語用で「思ふ」に連用される会話のみに使われる聞き手に対する丁寧語、と古語辞典に説明されている。

「*荒磯蔭に(明石の荒磯蔭に育つのは)､心苦しう思ひきこえさせはべりし(心苦しいと思い申していた)*二葉の松も(二枚に芽吹く松の若葉のような幼い姫君も)、今は頼もしき*御生ひ先と(上京して今は殿の庇護の下で頼もしい御将来と)、祝ひきこえさするを(お慶び申し上げますものの)、浅き根ざしゆゑや(身分の低い母腹の浅い根ざしの所為で)、いかがと(何か不都合が無いかと)、かたがた心尽くされはべる(色々心配される所です)」　*注に＜以下「心尽くされはべる」まで、尼君の詞。「荒磯蔭」「二葉の松」「生ひ」「浅き根ざし」は歌語かつ縁語。和歌的修辞。尼君の人柄、教養を窺わせるもの。下に「よしなからねば」とある。＞とある。「荒磯」は＜荒波打ち寄せる地方の海辺＞。「蔭」は＜御蔭＞で＜庇護のもとに育つ事＞。　*「双葉」は＜草木の芽を出したばかりの状態。多く人の幼少の時をたとえる。＞と古語辞典にある。　*「生ひ先(おひさき)」は＜伸び行く先。将来＞。

など聞こゆるけはひ(などと申し上げる尼君の素振りは)、よしなからねば(教養無いものでは無いので)、昔物語に(昔話として)、親王の住みたまひけるありさまなど(祖父宮がこの邸に住んで居らした様子などを光君はお訊ねになり)､語らせたまふに(尼君に語らせなさっている内に)、繕はれたる水の*音なひ(手入れの済んだ遣水のせせらぎが)、*かことがましう聞こゆ(往時を懐かしむように聞こえました)。　*「おとなひ」は＜音の響き＞の他に、一般的な＜様子、評判＞の意もあるらしいが、此処では＜音の響き＞。　*「かこと」は＜託し言＞で＜不平、口実＞などと古語辞典にあるが、此処では文脈からして＜祖父の託した言葉＞だろうし、その中身は＜華やかな往時の思い出＞なのだろう。

「住み馴れし人は帰りてたどれども、清水は宿の主人顔(あるじがほ)なる」(和歌 18-08)

「懐かしい人の名を呼べば、答えは水の音ばかり」(意訳 18-08)

わざとはなくて(取り立てて歌を詠み上げるという事も無く)、言ひ消つさま(つぶやく尼君の様子を)、みやびかによし(優雅に品がある)、と聞きたまふ(と光君は御聞きになります)。

「いさらゐははやくのことも忘れじを、もとの主人や面変はりせる　（和歌 18-09）

「未練を掬ってみたものの、川の流れは変わってた　（意訳 18-09）

*分かり難い語が続くのに、然したる注釈の無い不思議さ。「いさらゐ」は＜些かな井戸（ささやかな水溜り）＞のことらしい。ただ、「井（ゐ）」は＜泉または流水から飲料水を汲み取る場所＞と古語辞典にある。ということは、「いさらゐ」は＜すくい取った僅かな水＞とも言えそうだ。「早くの事」は＜昔の事＞のことらしい。ただ、「いさらゐ」を＜すくい取った僅かな水＞とするなら、「早くの事」は＜流れ去った事柄の記憶＞とも言えそうだ。その筋なら「もとのあるじ」は＜祖父親王＞というよりは＜王家の血筋＞で、「おもがはり」は〈主人顔の流水〉ではなく＜絶えた家柄＞。通せば、この歌の表意は＜すくい取った水も流れていた時の事を忘れないのに川の流れ自体が変わってしまった＞という一般的な世のはかなさだが、複意は＜連なる者は栄華の時代を忘れないが王家の血筋は既に絶えてしまった＞という明石君個別の家柄を残念に思っている、のだろう。

あはれ（感慨深いものです）」

と、うち眺めて（遣水に目をやって）、立ちたまふ姿（渡殿にお立ちになる光君の御姿の）、にほひ（艶やかさは）、世に知らず（他に無い）、とのみ思ひきこゆ（とばかり尼君は思い申します）。

［第五段　嵯峨御堂に出向き大堰山荘に宿泊］

御寺に（みてらに、嵯峨御堂に）渡りたまうて（光君は出向きなさって）、月ごとの（毎月の）十四（じふし）、五日（じふご）、晦日の日（つごもりのひ、末日に）、行はるべき（行われる事に成っている）*普賢講、阿弥陀、釈迦の念仏の三昧をば（さんまいをば、読経会などは）然るものにて（さるものにて、当然の行事として）、またまた加へ行はせたまふべきことなど（さらにまた加えて行はさせようという法会を）、定め置かせたまふ（決めて励行させなさいます）。堂の飾り（礼拝堂の装飾様式や）、仏の御具（おんぐ、供え物）など、めぐらし（工夫を凝らした指示を）仰せらる（言い付けなさいます）。　*「普賢講（ふげんかう）、阿弥陀、釈迦の念仏」の内容や違いには立ち入らない。ただ名詞の意味として「普賢講」は＜普賢菩薩の功徳をたたえる法会（ほうえ）。＞と大辞泉にあり、「普賢菩薩」は＜有徳で女性を庇護する偉人＞として拝されていたらしい。「阿弥陀仏」には＜極楽往生＞を願い、「釈迦牟尼」には＜悟り＞を乞う、といった所のようだが、まぁ良く分からない。

月の明きに（あかきに、明るさの中に）帰りたまふ（光君は山荘に御帰りに成ります）。*ありし夜のこと（光君が明石での出会いの夜のことを）、思し出でらるる（思い出していらっしゃる）、折過ぐさず（その時を逃さずに）、かの琴の御琴さし出でたり（明石君は光君が明石に残した七弦を差し出して楽奏をお勧めします）。　*「在りし夜（過去の夜）」とは何時の事か。思い出すに足る相似条件は、先ず「月の明きに帰りたまふ」季節柄だが、八月十五夜の中秋の名月なら明示するだろうから、少し外れた十三夜とか十七夜あたりを想定して置く。次に、御堂を出発して山荘に到着するという道筋の条件。是等から「ありし夜」は、4 年前の八月十三日に明石で光君が入道の念仏堂近くの明石君の岡辺荘を初めて訪れた夜に合致する。因みに離別間際の合奏と形見の七弦を置いた日は八月初旬の闇夜であり、光君の帰郷後初参内が八月十五日の中秋の名月だったと「明石」巻に記されていた。

そこはかとなく（何処が如何とはっきりとでは無く）ものあはれなるに（情感が湧いて）、え忍びたまはで（とても思いを隠せ為されず）、掻き鳴らしたまふ（光君は七弦を爪弾きなさいます）。まだ調べも変はらず（今でも琴の音色は変わらず）、ひきかへし（弾くほどに思いも引き返し）、その折今の心地したまふ（当時の事が今の事のように思われました）。

「契りしに変はらぬ琴の調べにて、絶えぬ心のほどは知りきや」（和歌 18-10）

「琴の調べのなつかしさ、同じ心に響き合う」（意訳 18-10）

女、

「変はらじと契りしことを頼みにて、松の響きに音を添へしかな」（和歌 18-11）

「懐かしい琴を弾きながら、山里深く待ちました」（意訳 18-11）

と聞こえ交はしたるも（と詠み交わし申し上げた歌も）、*似げなからぬこそは（見劣りしなかった事は）、身にあまりたるありさまなめれ（明石君の身に余る光栄でした）。こよなうねびまさりにける容貌（とても良く歳と共に円熟した明石君の容貌や）、けはひ（物腰を）、え思ほし捨つまじう（光君はとても忘れられず）、若君、はた（姫君をもまた）、尽きもせず*まぼられたまふ（飽きもせず思わず見守りなさいます）。　*「似げ無し」は＜似合わない、相応しくない＞で、＜釣り合いが取れない→見劣りがする＞と読んだ。　*「まぼる」は「守る」で＜見守る、見つめる、守る、保護する＞。「らる」は＜動作が自然に起こる意、自発を表す＞助動詞と読んで、＜思わず＞と言い換えた。

「いかにせまし（どうしたものだろう）。隠ろへたるさまにて生ひ出でむが（姫君が此処でこのまま人目を避けて成長していくのは）、心苦しう口惜しきを（不本意で可哀相なので）、二条の院に渡して（二条院の夫人に引き渡して）、心のゆく限りもてなさば（出来るだけの世話をすれば）、*後の覚えも（将来の姫君が入内する時の世評の）*罪免れなむかし（田舎育ちという悪口は避けられるだろう）」　*「のちのおぼえ」は逐語で＜将来の世評＞だが、注には＜『完訳』は「姫君が入内する時の世評」と注す。＞とある。光君の思惑を忖度すれば妥当な注解釈で、この文は光君の思惑に違いない。　*「罪」は注に＜『完訳』は「田舎育ちという悪評」と注す。＞とある。妥当だろう。

と思ほせど（と御考えに為るが）、また（一方では）、思はむこといとほしくて（明石君の気持ちが可哀相で）、えうち出でたまはで（とても言い出し為されずに）、涙ぐみて見たまふ（涙ぐんで姫君を御覧になります）。

幼き心地に（幼子は）、すこし恥ぢらひたりしが（少し人見知りしていたが）、やうやううちとけて（次第に慣れてきて）、もの言ひ笑ひなどして（何か言っては笑ったりして）、むつれたまふを見るままに（親しまれるのを見るに付け）、匂ひまさりてうつくし（生き生きと輝いている）。抱きておはするさま（光君が姫君を抱いていらっしゃる姿は）、見るかひありて（見ればはっきりと分かって）、宿世こよなしと見えたり（親子の縁の紛れもない確かさを示していました）。